



イイケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 639 回 地方創生は、ほど遠い！

2015.7.26

数年かけて、我が住む地域の将来構想なるものを模索してきたが、その調査結果をまとめた報告書が出来上がり、今手元に届いた。

全くのお決まりのパターンで、中小企業庁系の補助金により、東京大学の教授が委員長となり、我々当事者委員、オブザーバーは地方行政とその他関係者、そして取りまとめは東京の有名(?)コンサルタント会社という、旧態依然の陣容で数年間、議論を重ねた結果の報告書であった。

内容を読むと、大学教授のプライドをかけた「真面目さ」は伝わってくるし、行政見解らしい「常識」は貫かれ、無難な形でまとめようとするコンサルタントの職人技が光っているが、…「だから何なの?」、「本気でこれをやれとでも思っているの??」という疑問が、最後まで拭いきれないでいる。

自分が委員として関わっていながら、はなはだ無責任だが、この報告書、一体誰のために、何の目的で書かれたものか…十分咀嚼しきれないうちに、制限時間、「ビジョンづくり屋さん」がうまくまとめ、結果報告として製本され関係者に配布するのが実際のところかもしれない。

実は「地方活性化ビジョン策定事業」なるものの多くは、こんな経緯で報告書が出来上がっている。

ここで言う～「常識」と客観的な「真面目さ」が、どのくらい地方の衰退を招いてきたか？

少し考えてみた。

唯一地域内から出る意見は、従前の常識を守り、多くの人知っている方法で、従来のプロセスをできるだけ早く処理できる真面目さを最良とする。活性化策の客観的アイデアや、各地での成功事例を、学者やコンサルタントに求め、我が地域の「地方創生」のネタとする。

そもそも地域を活性化させるのに必要なのは、客観的な助言ではなく、主体的に問題解決のために知恵を出し、実行することだと思う。

つまり、地域の行政も民間も、自分たちの事は自分達の頭で考え実行することが、地域活性化の基本であり、必要な専門家の方にはその時々助けてもらえばいいのであるが、そんな面倒なことをしないのが補助金事業だ。

「ビジョンづくり屋さん」のおかげで、ビジョンは立派なものできたけど、関係者誰も感動せず、共鳴しないから、誰ひとりそれを実行しない。

不思議なことに、この実現しない事業に対して、誰ひとり責めを受けないし、罰則もない。

偉い学者や、コンサルタントの先生方の、時代ボケした感覚と無責任体質は、正直驚く次第であるが、事実、補助金・助成金と言う名の税金が、こんな使われ方をしたとしても、実は誰も責任をとらない。

未だに多くの地方は、このやり方を踏襲しているが、その結果が地方の衰退化に歯止めがきかず、全く活かされない調査報告書の山を築いてきたはずである。

この状況のまま推移すれば、巨額の税金が何も価値なく消えていく。「他の自治体に出し抜かれるな」と競い合い、やらないよりやった方が益し。結果、全国でほとんど同じことを、同じように実施することになってしまう活性化事業。もはや「地方創造」に求められる「希少性」という要素は皆無となる。

もし「地方創造」の過程でコンサルタントの役割があるとすれば、目指すべき自分達の地方を自ら築き、「地方そのものを経営する」経営者陣の人材育成指導、支援にあると思う。

地域の変革を阻む困難を乗り越える力を持った経営者、そんなスーパースター&サブスター達を育て、見つけ、助けるべき役割がコンサルタントに課せられた最大のミッションである。

その最も有益なツールとして、「補助金・助成金」が機能してほしいと願っている。